

氏名(国籍)	ほん 洪	ゆん 潤	びよ 杓	(韓国)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博甲第4873号			
学位授与年月日	平成21年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	一九六〇年代の三島由紀夫と戦後日本 —「歴史を書き直す」ことの意味—			
主査	筑波大学教授	博士(文学)	青柳悦子	
副査	筑波大学教授	博士(文学)	新保邦寛	
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	秋山学	
副査	筑波大学准教授		加藤百合	

論文の内容の要旨

本論文は、三島由紀夫(1925-1970)の一九六〇年代の諸作品(とくに1966年の「英霊の声」まで)を、変わりゆく戦後日本社会のありようとの関連から再検討し、三島の創作活動がこの新たな時代状況の中で「歴史を書き直す」という使命に収斂していく過程を明らかにするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一章 三島由紀夫「憂国」における一九三六年と一九六〇年

第二章 三島由紀夫「十日の菊」における同一化への眼差し

第三章 三島由紀夫『美しい星』における〈想像された起源〉

第四章 三島由紀夫と大衆消費文化

第五章 「下らない」安全な戦後日本への抵抗

第六章 三島由紀夫と一九六四年東京オリンピック

第七章 〈現人神〉と大衆天皇制との距離

結章

序章では、三島の文学がその特異な死の事件との関係において論じられてきたこれまでの研究動向をふまえた上で、同時代の政治的・社会的・文化的状況に敏感に反応した作家として彼を捉え直そうとする本論文の問題意識を提示する。

第一章では、後に「二・二六事件」三部作の一つとして位置づけられる「憂国」(61年)を取りあげ、三島が自分の属す時代に対して抱いていた〈ズレ〉の意識・抵抗意識を読みとる。時代背景としては安保闘争と戦後の性の解放に着目する。前者は「公」の領域での、後者は「私」の領域での、戦前と戦後の日本社会の断絶を顕在化するが、三島はこれに対して「戦前・戦後の連続性」をみずからの作品によって打ち立てる

ことを目指した、とする。

第二章では、三部作の中では論じられることの少ない「十日の菊」(61年)を取りあげる。この作品が、「二・二六事件」で狙われた大臣森重臣の家の女中、奥山菊の裸を主題化していることに注目し、菊の肉体が、悲劇と大義とエロスが一瞬のうちに収斂するいかにも三島的な肉体であることを指摘する。「至高の栄光の瞬間」の象徴としてのこの肉体を成立させるのはそれを見る「眼差し」であることを押さえ、対象への「同一化」を求める「眼差し」を作品から抽出する。またこうした特徴を、三島自身の肉体観と結びつけ、彼が自分自身を時代の中で〈見られる〉オブジェと成そうとしたことに関連づける。

第三章では、風変わりな作品『美しい星』(62年)を取りあげる。この小説では、平凡な家族がある日から自分たちが宇宙人であると信じ始める。彼らによって示されるのは、現実だと思っていた歴史は「贋物の歴史」であり、記憶から消えてしまった歴史こそ「本当の歴史」だという考えである。ここから、想像力によって「起源の物語＝歴史」を作り出し、危機に陥ったアイデンティティを再構築しようとする三島の意志を読みとる。時代背景としては、戦後の混血児問題から沸き起こった「純潔教育」やそれと表裏一体の「純血主義」が当時の人々のアイデンティティの混乱を逆照射していることを指摘し、こうした危機感の共有に三島独特の「歴史」意識の萌芽があるとみる。

第四章では、これまでほとんど研究対象とされることがなかった短篇「自動車」および「可哀さうなパパ」(ともに63年)を主に取りあげながら、三島と大衆消費社会との関係を集中的に論じる。まず6回にわたる三島のアメリカ旅行に着目し、彼が——意外にも——アメリカにおける大衆消費文化の発展、商業主義の展開、その帰結としての文化や様式の均質化・規格化を賛美していたことを押さえる。その上で現代日本を舞台にした「自動車」「可哀さうなパパ」などの作品が、高度大衆消費社会における「絶対的」価値(たとえば「神」「国家」「共同体」など)の欠如を問題化する面も持つことを指摘する。

第五章では、やはり見過ごされがちな作品「剣」(63年)について論じる。現代の「下らない」風潮と対極的な生き方を貫く剣道家の青年次郎と、その次郎に憧れながらもアメリカナイズされていく戦後日本の文化の中に身を置く壬生の対比が描かれていることに着目し、その社会背景として戦後の日本で武道が「スポーツ」化されて「安全」な文化の一翼を担うように変質させられてきたことや、他方で(壬生が持ちたがる)電気剃刀に象徴される西洋の商業主義・実用主義が日本に浸透してきたことを検証し、こうした時代状況に直面した三島の問題意識を浮かび上がらせる。

第六章では、1964年に開催された東京オリンピックに際して三島が書いた一連の新聞記事を取りあげる。三島がオリンピックの取材活動を積極的に行ない熱烈な感動を込めた文章を書いていたことは、これまで看過されてきた。西洋の基準で行なわれるこの大衆的イベントを三島が肯定的に受け止めた裏に、オリンピックが戦後の日本において新たな形のナショナリズムを可能にする契機としてあったこと、また三島にとってはとりわけ戦前と戦後との連続性を回復する貴重な機会としてあったことを指摘する。

第七章では、普通、三島独自の国粹的な思想が集約された作品とみなされる「英霊の声」(66年)を取りあげる。ここで提示される三島にとっての天皇像の問題が政治的次元ではなく美学的な次元にあること、とくに「距離」の「瞬間」的消滅という時間・空間的な美的「合一」の形象をこの作品が描き出そうとしていることを論じる。また戦後の大衆天皇制に対する三島の強烈な批判を同時代的背景から探ると同時に、虚構作品の創作をもってしても解消できない、現実の時代状況を前にした三島のジレンマを抉り出す。

終章ではこれまでの作業を振り返るとともに、戦前と戦後の断絶を克服すること、および、1960年代の日本の不安定なありようを乗り越えてアイデンティティを再構築することが三島の課題であり、この課題に応えるために文学創作を通じて「歴史を書き直す」試みが展開されたのだと論じる。

審査の結果の要旨

本論文は、1960年代の三島由紀夫のテキストと戦後日本の時代状況との関わりを丹念に論究することによって、三島の諸作品と思想に新たな光を当てた意欲的な研究である。三島を超時代的な思想を掲げた観念的な作家とみなすのではなく、彼を徹底的に時代の中に置くことに本論文の特徴がある。戦後の時代状況の変化に敏感に反応した作家としての側面を注視することによって、三島をその衝撃的な死を出発点にして論じるこれまでの硬直した見方から解き放った功績は大きい。本論文は、社会の中で葛藤するとともに新時代を謳歌もした三島の多面的な姿を的確に捉えながら、彼の特異な美的観念が醸成されていく過程を析出することに成功しており、三島研究として画期的な寄与を行なうものである。

本論文の前提には先行研究の丹念な読み込みとそれらの的確な位置づけがあり、学術的に高い信頼をおくことができる。その上で独自の視点を切り出していく著者の鋭利な問題意識は、三島研究をより生き生きとしたものとして刷新していこうとする気概に支えられており、そこから多くの発見に満ちた作品の読み直しが可能になったと思われる。また本論文が援用した三島関連の資料のいくつかは先行研究がまったく触れていないものであり、こうした新たな資料の発掘とも呼ぶべき作業が必要に応じて展開されている点も評価される。

一方、1960年代がいかなる屈折の時代であったのかを三島の模索を解き明かす作業の中で照らし出したことの意義も大きい。三島を時代状況から捉え返すためには、彼の生きた時代そのものを把握し直す作業が不可欠であるが、本論文は新聞記事の精査など歴史的検証作業をみずから行なっている点も評価できる。

ただし、多くの点で優れたこの研究にも、望まれる点がないわけではない。各章で取りあげた論点の総合と60年代を通した三島の変容についてのより包括的な説明などは、今後に俟たれる課題であろう。しかしこれらは、本論文が成しえた成果が喚起する二次的な達成目標であり、新たな観点から一貫した論を構築するという目的のためにはあえて先送りせざるをえなかった点でもあって、本論文がなした功績はいささかも揺らぐものではない。

よって、著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。